

# かわかみ通信

2019年1月  
己亥年正月号

新年明けましておめでとうございます。本年も「かわかみ通信」にお付き合いのほど、よろしくお願いいたします。

今年は皆さんもご承知の通り干支は「イノシシ」、亥年になります。亥は、十二支の最後で、それぞれに季節が割り当てられていますが、亥の季節は冬です。春の芽吹きまで、じっと固い種の中でエネルギーを内にこめている。まさにそうしたイメージが亥年の持つ意味です。また、歴史上大地震が亥年に多く起きていることも気になります。お互い気をつけたいものです。



森一鳳の猪図

## 《閑話休題》

さて、本題ですが、今回は三つ巴の紋の話はお休みにします。現在、神社研究家の玄松子氏が調べられた約650ある三つ巴を神紋とする神社について精査中なので、報告はまたの機会にしたいと思います。

昨年11月の中日新聞のある記事についての話をします。祖国から逃れて他国に来た人のことを『難民』と日本では表現されます。日本で難民と自らのことを言うと、日本の人が急に警戒してしまうという話がありました。ある国ではニューカマーと表現するのだそうです。直訳すると新しく来た人々となります。スマートに感じられますね。

ところで、古代の日本には中国大陸や朝鮮半島から多くの人々がやってきました。現代ではそれらの人々のことを『渡来人』と呼びます。(帰化人と表現していた時代もあった) 古代ではそれらの人々を、実は「今来の人(いまきのひと)」と言い表していたのです! ニューカマーとよく似たニュアンスではありませんか? 「今来の人」という言葉とは、何かしらこちらに「幸せを持ってくる人」という期待の気持ちが入っているように感じられます。一方「難民」という言葉には「災」を持ってくる人々のようなニュアンスが感じられてしまいます。本来は苦勞して難を逃れてきた人という意味なのでしょうが。

古代の「今来の人」も中国大陸や韓半島で戦に敗れて逃れてきた人々もいたはずですが、古代の日本の人々は暖かく異国の文化とともに迎え入れたのでしょうか? 日本列島には縄文文化を受け継いできた人々がおおり、そこに多くの渡来の人々が移ってきたものと考えられています。縄文系の人々が今来と表現することはないと思うので、先に来た古来(ふるき)の人々が今来のひとつと呼んだのではないかとと思うのですが、どうでしょうか?

京都に平野神社という神社があります。(ちなみに神

紋は山桜です) 御祭神は主神として今木皇大神(いまきのすめおおかみ)、さらに久度大神(くどのおおかみ)、古開大神(ふるあきのおおかみ)、比売大神(ひめのおおかみ)です。古く大和国において祀られていた今木は延暦元年(782年)の時点で平城京の田村後宮に祀られていた。桓武天皇の平安京遷都に伴い大内裏近くに移し祀られていたのが現平野神社の創建となります。今木は元々今来であったものが、奈良平安時代頃に今来になったという説があります。



京都市にある平野神社の本殿



平野神社の神紋「山桜」

今木皇大神は第50代桓武(かんむ)天皇の母で百濟出身の高野新笠(たかののにいがさ)の父母の祖神という説が有力です。

特別なケースかもしれませんが「今来の人」の象徴と考えれば良いのではないのでしょうか。

我が敦賀市の隣に今庄という町があります。前号でご紹介したごとく、新羅(しんら)神社、白髭(しらひげ)神社があります。いずれも新羅系の神社で、新羅からの「今来の人」達が祀ったものと思われます。「今来の庄」→「今の庄」→「今庄」となったのではないかというのが私の勝手な推測です(こじつけ)。昔は宿場町、現代では鉄道の町、今は静かな農村。平和なたたずまいを見せている町です。

「難民」を「渡来人」、さらには「今来の人」と言い表す時代が来れば良いのと思いますが、理想主義でしょうか?

今年が皆様にとって平和な年でありますよう祈念いたします。  
川上医院 院長 川上 究



月から見た地球。「小さく小さい」

ひちゃんめいけん

# またまたまたの

## 奮闘記

### 第九弾

1110のまのま

#### 【河野村の巻】



市境の敦賀トンネルを出て、すぐに左に見える林道入口

9月24日今日は秋分の日。振り替え休日の日だ。天気予報では曇り後雨だったが、まずまずの天気。昼過ぎまでは持つだろうとのことで「行くぞ!」「どこ行くぞ?」。前回の「またまた歩きの奮闘記第8弾」でご案内した今庄宿の隣で昔の河野村へ向かうことにする。前から気になっていた山中峠。先日車で8号線を走っていたら、ちょうど市境の敦賀トンネルを出たところ「ふるさと林道(山中)大谷線」の看板を発見。「ひよつとしたら、これと違うか?」「違ったらどうしよ」「まあ行



敦賀湾を臨む。晴れていればもっと絶景なのに、もやがかかっていた

岐点。右へ行けば山中峠、左へ行けば菅谷(すげんたん)峠と書いてある。右にハンドルを切り少し走ると、今度は下り坂。やがてなだらかな坂の途中に案内板があり、山中峠の先70

けるとここまで行こか」当方四駆のジープタイプ「大体行けるで。まあまあ急な坂道を登っていく。『そんなに大したことないな』と言いつつ、結構高いで。『3〜400坪はあるで』敦賀湾が眼下に見える。雲の具合で水平線はハッキリしないが、良き眺めだ。もう少し走ると、分



山中峠の案内板。ここを下ると山中峠に通じる古道がある



沢に沿って細道が続く。どうやらこれが山中峠への古道のようだ

そのまま下ると、すぐに通りに出た。これが旧北陸線の線路跡の道路だ。「なんや早から出たんか」「案外すんなり来たな」この道路は前号でご案内した木の芽峠からの幹線林道で下りてきた同じ道になる。あの歩いて登る山中峠への獣道は今後の宿

0位との表示。見れば、道とはいえない、獣道のような道が沢に沿って走っている。「これやろか」「行ってみるか」。ちょっと行きかけて「やっぱ止めよ」「危険が危ないな」君子危うきに近づく、違うか! どうもこれが本来の古道なのかも知れない?

題としておこう。さて、まだ時間は早い。「次は河野村の北前船主の館、右近家へ行く」と歩を伸ばす。資料館を見学。ここは大きな船を何艘も所有し、かなり大掛かりな海運業だったようだ。子孫の親族等は全員地元にはいないそうだが、この資料館は今だ個人所有しているらしい。その頃に始めた海上保険会社が今では「損保ジャパン」として存在しているとの事。「へえ、くすくすいいな」



カフェの前庭から河野港を臨む。良い眺めだ

敦賀には大和田荘七という人がいて、ここに負けないほどの

この上に洋館の別荘があるというので、覗いてみることにする。今日は足を使わなかったの、ここへ来て階段の登り。「金ヶ崎くらいあるで」といいながら、ヨタヨタと歩く。着くと「あら良い景色」その時代船主さんが船の往来をここから眺めていたのだろう。ちよつとその気分を味わおうとカフェになっている応接室にてティータイム。

実業家だったはずなのに、今は見る影もない。「何が違ったんやろ?」「やっぱ敦賀は昔からまちづくりが下手やったんかな」との会話で締めくくる。船で上がった荷物を府中(現越前市)に送るため、自社でトンネルを掘り道路を作ったとの話。その名は「春日野新道」というらしい。「よっしゃそこへ行こう」ガイドに道を聞いて出発。しかし、いくつもの道がありすぎて、どれが春日野新道なのか分らない。どんどん山の中へ入って行って、結局行き止まりだったり、「こっちなかな」といつて車を進めると、鹿の家族に遭遇。3〜4頭はいただろう。向こうもビックリしたやら、飛び跳ねて山に入ってしまった。「クマやなくてよかったな」結局その道が分らず、元の通りに戻った。途中で右へ行くと「ホノケ山」との案内板があった。「これを登ればホノケ山に行けるんやな」「また今度行こか」。そのまま進み新しいトンネルを通ると今庄まで直通でいける。車も少なく快適だ。前回同様今庄ソバをいただき、帰路について。(河)

【発行】平成31年1月8日(火)  
かわかみ通信Vol.28

医療法人 川上医院

福井県敦賀市松原町1-39

TEL: 0770-22-0977